

吐蕃に於ける律蔵の蔵訳

原 田 覺

吐蕃に於ける蔵訳仏典の目録として周知である三種類の目録の内 *dkar chag mChims phu ma* は現在も所在不明であり、現存チベット大蔵経所収の『デンカルマ目録』*dkar chag lDan[lHan] dkar ma(Dk.)*¹⁾と、中国で 2003 年に資料の公刊があって以後、研究が進展し始めた *dkar chag hPhan than ma*²⁾との二種類の目録が現在のところ利用可能である³⁾。筆者は従来から *Dk.* が記載する仏典に対応するチベット大蔵経(sDe dge 版)所収の仏典の蔵訳に関する奥書を回収し、それ等を基礎資料として吐蕃に於ける仏典の蔵訳事情の解明に努めてきた⁴⁾。ここでは *Dk.* が記載する律蔵の蔵訳に関する奥書を検討した上で、併せて吐蕃の三大翻訳師の一人であり、この律蔵の蔵訳の分野でも活躍した Cog ro Kluhi rgyal mtshan のその他の仏典の蔵訳に関する奥書をも検討し、既に検討した中観部の彼の蔵訳仏典の検討結果⁵⁾とも対照し、彼の翻訳活動の全体的位置づけを可能な範囲で行いたい。

以下に最初に検討する *Dk.* の律蔵の部分は「[XIX]律の蔵に於いて」という項目下にまとめた *Dk.* Nos. 483~513 の計 31 仏典である。但し ***Dk. No. 486*** は 16,200 頌で 54 巻の『律(毘奈耶)上分』(改訂記あり)であり⁶⁾、***Dk. No. 494*** は 3,300 頌で 11 巻の『律事広注』であり、***Dk. No. 496*** は 3,000 頌で 10 巻の『律雜事解説』(後伝期の奥書あり)であり、***Dk. No. 497*** は 6,000 頌で 20 巻の『律上分広注』であり、***Dk. No. 501*** は 2,100 頌で 7 巻の『波羅提木叉(戒)注』であり、***Dk. No. 503*** は 600 頌で 2 巻の『[説一切有部]比丘尼波羅提木叉注』(敦煌本あり)であり⁷⁾、***Dk. No. 510*** は 65 頌の『十八部名次第』であるけれども、以上の計 31,265 頌で 104 巻 65 頌の計 7 仏典は吐蕃期の奥書を欠いており、***Dk. No. 487***(注 6 参照)は 3,300 頌で 11 巻の『律問答』であり、***Dk. No. 498*** は 33,600 頌で 112 巻の『波羅提木叉の大広注』(プトン No. 451 参照)であり⁸⁾、***Dk. No. 512*** は 50 頌の『比丘の戒[律]』(プトン No. 497 参照)であり、***Dk. No. 513*** は 20 頌の『偷盜の場合に四[人の]親教師が伺察すべきこと』(プトン No. 2947 参照)であるけれども、以上の計 36,970 頌で 123 巻 70 頌の計 4 仏典は対応する蔵訳仏典が不詳であるので、残りの計 20 仏典が検討対象となる。

Dk. No. 483 は 32,700 頌で 109 卷の『[説一切有部]毘奈耶(律)本事』(敦煌本あり)であり、奥書は「Kha che の親教師[たる]Sarba dzñā de ba と| インドの親教師[たる]Bidyā ka ra pra bha と| Kha che の親教師[たる]Dharmā ka ra と| 翻訳師[で]僧侶[たる]dPal gyi lhun po[と]が翻訳し了り且つ| インドの親教師[たる]Bidyā ka ra pra bha と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]dPal brtsegs[と]が翻訳し了り且つ校閲し了って決定したものなのである|| ||とある。 **Dk. No. 488** は 800 頌で 2 卷 200 頌の『[説一切有部]比丘尼律分別』(敦煌本あり)であり、奥書は「Kha che の親教師[たる]Sarba dzñā de ba と| Dharmā ka ra と| インドの親教師[たる]Bidyā ka ra pra bha と| 翻訳師[で]僧侶[たる]dPal gyi lhun po[と]が翻訳した| インドの親教師[たる]Bidyā ka ra pra bha と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]dPal brtsegs が校閲し了って決定したものなのである| |」とあり、No. 483 の奥書に近似しているけれど、No. 483 は「翻訳し了り且つ」を重複して記述して文脈が混乱しており、本来は No. 488 の奥書の如くであったであろう一方で、インド人翻訳師の第二と三が入れ替わり「Kha che の親教師」たることを再度記入しており、これが本来の奥書の記述であり、再度の記入を省略するために、第二と三を入れ替えて書写を行ったのが No. 488 の奥書であろう。尚インド人翻訳師の三者は何れも『二卷本語合』前書のインド人翻訳師の名表⁹⁾に記載がない。また No. 488 の奥書に従うならば dPal brtsegs は dPal gyi lhun po の先輩翻訳師でありながら、[大]校閲に当たって第一のインド人翻訳師と一緒に校閲を行っていないのは、当人の帰国や死亡などで、むしろそう出来ない事情があり、担当する長が Sarba dzñā de ba から Bidyā ka ra pra bha に交代したからであろう。律蔵の基本的仏典である *Dk. No. 483* を蔵訳した dPal brtsegs を Kluḥi rgyal mtshan の先輩翻訳師としたい所であるけれど、中観部で吐蕃仏教の導入に大きく貢献した Śāntarakṣita と Kamalaśīla との仏典を先輩翻訳師である Ye śes sde が蔵訳し、基本的仏典である龍樹の『中論』と諸注釈書を後輩翻訳師である Kluḥi rgyal mtshan が蔵訳した(注5拙稿参照)のと同様に、ここでも Kluḥi rgyal mtshan が先輩翻訳師であって、dPal brtsegs が後輩翻訳師であるとすべきであるのは、以下に見るインド人共訳者との関係などによってである。

Dk. No. 484 は 24,900 頌で 83 卷の『律分別』(敦煌本あり)であり、奥書は「最勝の自在の主権者[たる]吉祥なる dpal 神贊普 lha bTsan po の勅令 ~~bkhah~~/bkah luṅ によって| 聖なる根本説一切有[部]の律を持す Kha che の毘婆沙師の阿闍梨[たる]Dzi na mi tra と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]Kluḥi rgyal mtshan[と]が翻訳し了り

且つ校閲し了って決定した| これに於いて頌は二万五千有る| 卷は八十三[と] 為したのである|| ||¹⁰⁾とあり、卷数は一致するものの、頌数は百頌多くなっている。類似した内容の奥書は以下に示すものの外に「XXII. 中観の論書」(注5 拙稿参照)にも存在し、Kluhi rgyal mtshan に特徴的な文面の奥書である。奥書中の「吉祥なる神賛普」は唐蕃会盟碑(822年)などに一般的な「聖 hphrul gyi 神賛普」という尊称を仏教的に転化したものであろうし、そのことはこの賛普をティツクデツェン Khri gtsug lde brtsan 王(806~815~841)とすることを妨げない¹¹⁾。なお Dzi na mi tra は『二卷本語合』の名表の最初に記載がある。Dk. No. 489 は700頌で2巻100頌の『比丘男戒(波羅提木叉)經』(敦煌本あり)であり、上記の奥書の「Kha che の毘婆沙師の」という記述と頌数卷数の記載とを欠いており、氏族名である Cog ro を付している。Dk. No. 490 は800頌で2巻200頌の『比丘尼戒經』(敦煌本あり)であり、上記の奥書の頌数卷数の記載を欠いており、Cog ro を付し、末尾を「決定したものである|| ||」としている。律蔵注疏の最初である Dk. No. 491 は2,700頌で9巻の『律經』(敦煌本あり)であり、末尾の記載は「決定したものである|| ||これに於いて頌は二千七百有るのである| 卷は九と為したのである|| ||」としている。Dk. No. 492 は3,600頌で12巻の『百一羯磨』(敦煌本あり)であり、末尾の記載は「決定したものである| これに於いて頌は三千七百有る| 卷は ni 九と為したのである|| ||」としており、100頌増加する一方で3巻減少している。Dk. No. 495 は4,500頌で15巻の『律分別語句解説』であり、末尾の記載は「決定したものである|| ||これに於いて頌は五千一百有る| 卷は ni 十七[と]為したのである|| ||」(注10参照)としており、600頌の増加に応じて2巻増加している。Dk. No. 502 は600頌で2巻の『波羅提木叉語句備忘』であり、奥書の「翻訳し了り且つ」を欠き、末尾を「決定したものである|| ||」とし、プトン No. 449 は「偉大なる Dā na śī la が作ったと著名[で]」とするけれども、『二卷本語合』の名表の四番目の Dā na śī la の著作を、一番目の Dzi na mi tra が共訳したとするのは疑問であり、著者か奥書に誤伝があるかも知れない。Dk. No. 504 は21,000頌で70巻の『律經広注』であり、奥書は、上述した Dk. No. 484 と同様の文面であるけれど後述の Dk. No. 499 と同様に「偉大な[方で]」を加え、末尾を「決定したものである| これに於いて頌は二万一千有る| 卷は ni 七十と為したのである|| ||」としている。

Dk. No. 499 は15,000頌で50巻の『波羅提木叉広注律集』であり、奥書は「最勝の自在の主権者[で]大王[たる]吉祥なる神賛普の勅令によって聖なる根本説一切有[部]の律を持す偉大な[方で]Kha che の毘婆沙師の阿闍梨[たる]Dzi na mi tra

と| Sarba dzñā de ba と| チベットの大理校閱の翻譯師[で]比丘[たる]Cog ro Kluhi rgyal mtshan[と]が翻譯し了り且つ大理校閱を致し了りまして決定したものである|| |これに於いて頌は[一]万五千有る| |卷は ni 五十[と]為したのである|| |とあり、贊普に対する「大王」の尊称は「中觀の論書」Kluhi rgyal mtshan 訳の奥書にもあり(注5拙稿参照)、Sarba dzñā de ba は上述の如く dPal brtsegs と共訳を行っている。**Dk. No. 500** は 8,100 頌で 27 卷の『波羅提木叉本注』であり、奥書は「最勝の自在の主権者[で]大王[たる]吉祥なる神贊普の勅令によって| 聖なる根本説一切有[部]の律を持す Kha che[の]毘婆沙師の阿闍梨[たる]Sarba dzñā de ba と| 大理校閱の翻譯師[で]僧侶[たる]Kluhi rgyal mtshan[と]が翻譯し了り且つ大理校閱を致し了りまして決定したものである|| |これに於いて頌は九千有る| 卷は ni 二十七[と]為したのである|| |」とあり、900 頌増加しているけれど、卷数は変わらない。両奥書を対照する限りでは Kluhi rgyal mtshan が活躍した時期に、戒律に関するインド人学僧の長が Dzi na mi tra から Sarba dzñā de ba に交代し、前記の如く dPal brtsegs が活躍した時期に、Sarba dzñā de ba から Bidyā ka ra pra bha に交代したとすることができるであろう。

Dk. No. 485 は 24,600 頌で 42(82?) 卷の『毘奈耶雜事』(敦煌本あり)であり、奥書は「インドの親教師[たる]Bidyā ka ra pra bha と、Dharmma śrī pra bha と、翻譯師[で]僧侶[たる]dPal hbyor[と]が翻譯した|| |」とあり、文面は奥書として破格である。プトン No. 4 では伝本に混乱があることを窺うことができる。**Dk. No. 493** は 4,500 頌で 15 卷の『撰律』(敦煌本あり)であり、奥書は「インドの gyis/gyi 親教師[たる]Śī lendra bo dhi と| インドの親教師[たる]Śākya pra bha と| 大理校閱の翻譯師[たる]Bai ro tsa na rakṣi ta[と]が翻譯したものなのである|| |」(注10参照)とあり、Śī lendra bo dhi は『二卷本語合』の名表の三番目に記載がある。**Dk. No. 505** は 50 頌の『説一切有部沙弥頌』(敦煌本あり)であり、奥書は「インドの親教師[たる]Mu ni varma と| 大理校閱の翻譯師[たる]sNa nam Ye śes sde[と]が翻譯し了り且つ校閱し了って決定したものなのである|| |」とある。**Dk. No. 506** は 300 頌で 1 卷の『[説一切有部]三百頌』(敦煌本あり)であり、奥書を欠いているけれども、sDe dge 版目録部に「インドの親教師[たる]Sarba dzñā de va と| 大理校閱の翻譯師[たる]rTsañs De vendra rakṣi ta の翻譯| 」とある。**Dk. No. 507** は 2,400 頌で 8 卷の『三百[頌]広注具光』であり、奥書は「インドの親教師[たる]Sarba dzñā de ba と| 大理校閱の翻譯師[で]僧侶[たる]gTsañ De bendra rakṣita[と]が翻譯し了り且つ校閱し了って決定したものなのである|| |」とある。**Dk. No. 508** は 100 頌の『律問頌』であり、

奥書は「インドの親教師[たる]Dharma ka ra(ママ)と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]dPal brtsegs[と]が翻訳し了り且つ校閲し了って決定したものである|| ||」とある。**Dk. No. 509** は 1,664 頌で 5 巻 164 頌の『律問広注』であり、奥書は「インドの親教師[たる]Dharmā ka ra と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]dPal brtsegs[と]が翻訳し了り且つ校閲し了って決定したものである| 頌は[一]千六百六十四有るのである|| 」とある。**Dk. No. 511** は 50 頌の『異宗読誦輪[論]中異部教示』であり、奥書は「インドの親教師[たる]Dharmā ka ra と| 翻訳師[で]僧侶[たる]bZaṅ skyoṅ が翻訳し了り且つ校閲し了って決定したものである|| ||」とある¹²⁾。

以上が「律の蔵」の仏典であり、総計 149,064 頌で 496 巻 264 頌あり、その内 Kluḥi rgyal mtshan の蔵訳は計 81,900 頌で 273 巻であり 55% 強に相当し、その内 Dzi na mi tra との共訳が計 73,800 頌で 246 巻であり 90% 強に相当し、Sarba dzñā de ba との共訳が計 23,100 頌で 77 巻であり 28% 強に相当する。dPal brtsegs の蔵訳は計 35,264 頌で 117 巻 164 頌であり 24% 弱に相当し、その内 Sarba dzñā de ba と Bidyā ka ra pra bha と Dharmā ka ra との共訳が計 33,500 頌で 111 巻 200 頌であり 95% 弱に相当し、Dharmā ka ra との共訳が 100% である。De vendra rakṣi ta の蔵訳は計 2,700 頌で 9 巻であり 2% 弱に相当し、全て Sarba dzñā de ba と共訳している。また Dzi na mi tra の蔵訳は上記の計 73,800 頌で 246 巻であり 50% 弱に相当し、Sarba dzñā de ba の蔵訳は計 59,300 頌で 197 巻 200 頌であり 40% 弱に相当し、Bidyā ka ra pra bha の蔵訳は計 58,100 頌で 193 巻 200 頌であり 39% 弱相当し、Dharmā ka ra の蔵訳は計 35,314 頌で 117 巻 214 頌であり 24% 弱に相当する。

Dk. No. 29 は 900 頌で 3 巻の『聖無量光莊嚴[会]』(敦煌本あり)であり、sDe dge 版の奥書は「インドの親教師[たる]Dzi na mi tra と| Dā na śī la と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]Ye śes sde[と]が翻訳し了り且つ校閲し了って| 新[欽]定語によっても改訂し了ってから決定したものである|| ||」とあり、北京版の奥書では「僧侶[たる]Kluḥi rgyal mtshan が翻訳し了り且つ校閲した|| 」となっているけれど、文面は全く破格であり、信頼性に乏しく、インド人学僧は『二巻本語合』の名表の最初と四番目の学僧であり、当面は sDe dge 版の奥書の記載を採るべきであろう。**Dk. No. 60** は 1,200 頌で 4 巻の『聖善住意天子所問[会]』であり、奥書は「僧侶[たる]Kluḥi rgyal mtshan の gyi 校閲したものである|| 」とあり、プトン No. 163 も「Kluḥi rgyal mtshan の gyi 翻訳 ḥgyur| 」と支持するけれども、全く破格であり、sDe dge 版の目録部では「第三巻から第四[巻]の間で円満したものであって| インドの親教師[たる]Su rendra bo dhi と| Pradzñā varma と| 翻訳師[たる]Shaṅ Ye

śes (lakṣmī 122a7/b1)sde 等が翻訳し了り且つ校閲を完全に加えた[一]千二百頌」としており、Su rendra bo dhi は『二卷本語合』の名表の二番目の学僧であり、これを採るべきであろう。**Dk. No. 146** は 600 頌で 2 卷の『聖一切如来加持觀察衆生教示仏国土莊嚴[經]』であり、奥書は「インドの親教師[たる]Dzi na mi tra と| Su ren dra bo dhi と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]Ye śes sde[と]が校閲し了って決定したものである| 僧侶[たる]Kluḥi rgyal mtshan が翻訳し了り且つ校閲し了って決定したものである|| ||」とあり、プトン No. 201 は「Kluḥi rgyal mtshan と Ye śes sde[hi と]の翻訳 hgyur| 」としており、奥書の文脈は全く不明確であるものの、Ye śes sde 訳を Kluḥi rgyal mtshan が再度校閲したとも理解できるけれど、プトン B¹³⁾、No. 337 は「学者 Paṇḍi ta[たる]Dzi na mi tra と| Su rendra bodhi と| Ye śes sde[hi と]の翻訳 hgyur| 」として、Kluḥi rgyal mtshan を除外しており、当面はこれに従いたい。**Dk. No. 182** は 210 頌の『聖燃灯授記[經]』であり、奥書は「インドの親教師[たる]Bi śuddha siṅ ha と| 翻訳師[で]僧侶[たる]dGe dpal [と]が翻訳した| | インドの親教師[たる]Dzñā na garbha と| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]Kluḥi rgyal mtshan[と]が大校閲を致し了りまして決定したものである|| ||」とあり、目録部(lakṣmī 128b1))も同様の記述であり、プトン No. 271 も dGe ba dpal との翻訳であるとする¹⁴⁾。尚 Dzñā na garbha は中観部の蔵訳に於いて Kluḥi rgyal mtshan が共訳した学僧である(注5拙稿参照)。**Dk. No. 193** は 150 頌の『滅十方暗黒[經]』であり、奥書は「インドの親教師[たる]Bi śud dha siṅ ha と| 翻訳師[で]僧侶[たる]rTsañ De ben dra rakṣi ta¹⁵⁾[と]が翻訳し了り且つ校閲し了り| 大校閲の翻訳師[で]僧侶[たる]Kluḥi rgyal mtshan が大校閲を致し了りまして決定したものである|| ||」とある。

Dk. No. 531 は 12,000 頌で 40 卷の『解深密[經]広注』であり、**Dk.** は Kluḥi rgyal mtshan 造とし、奥書を欠いているけれど、プトン No. 654 は「四十卷程あるこれは無着 Thogs med のお造りになった[ものと]云って真実でなくて| [何故ならば]その適正(成道)を成就する道理 ḥthad sgrub paḥi rigs pa[hi] の品(?)から| それ等の性相を完全に区別すべきは最勝の自在の主権者[で]吉祥なる神賛普[たる]菩提神通 Byañ chub rdzu ḥphrul がお造りになった bKaḥ yañ dag paḥi tshad ma(**Dk. No. 723**)から生起したもの[それがそうである]通りに見るべく為されるべきなのであるとチベットの論書に典故を託し了る[ように]為し了り且つ Kun las btus と Tshad ma rnam nes[と]等の教理を引証したが故[に]なのである| |それによるならばチベットの或る大学者が作ったと[いう]様に為されるべきなのである| |Kluḥi rgyal

mtshan がお造りになったとも思うのである| |とあり, *Dk. No. 723* は Khri sroñ lde brtsan 王(742~797)の著作とされているので「吉祥なる神賛普[たる]菩提神通」は同王を指していることになる. *Dk. No. 619* については別に検討した(注 15 拙稿 b 参照). *Dk. No. 660* は 600 頌で 2 巻の『宝鬘』であり, 奥書は「インドの親教師[たる]Dzñā na garbha と| チベットの翻訳師[で]比丘[たる]Kluḥi rgyal mtshan[と]が翻訳し了り且つ校閲し了って決定したものなのである|| 」とある¹⁶⁾.

以上で奥書に Kluḥi rgyal mtshan の名前を持つ蔵経仏典の全てを検討したことになる. 九世紀の最初の四半期を中心として大校閲翻訳師である Ye śes sde が大乘経と唯識となどの重要仏典を蔵訳し, 次いで大校閲翻訳師となった Kluḥi rgyal mtshan が律蔵と中観となどの重要仏典を蔵訳し, 更に, 九世紀の第二の四半期を中心として, その後に大校閲翻訳師と成った dPal brtsegs が前二者の蔵訳し残した仏典を蔵訳することとなったのである.

-
- 1) 近年の出版に Rabsal (Rab gsal), ed., “Catalogue of Phodrang lHankarma” *Pho brañ lHan dkar gyi dam paḥi chos hgyur ro cog gi dkar chag blta bder bsgrigs pa gNah boḥi gtam la hjug paḥi pho ṅa bshugs so*, The Dalai Lama Tibeto-Indological Series 18, Sarnath: Central institute of Higher Tibetan Studies, 1996; Adelheid Herrmann-pfandt, *Die lHan kar ma*, Philosophisch-Historische Klasse Denkschriften 367, Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 2008 がある.
 - 2) 近年の出版に, 西藏博物館編『旁唐目錄; 声明要領二卷』*dKar chag ḥPhaṅ thañ ma; sGra sbyor bam po gñis pa*, 西藏博物館古籍珍本叢書 1, 2003 年; 川越英真『*dKar chag 'Phang thang ma*』東北インド・チベット研究叢書 3, 同研究会, 平成 17(2005)年; 徐麗華『藏文《旁唐目錄》研究』国家民委古籍保護中心重点項目・中央民族大学“211 工程”三期建設項目・国家珍貴少数民族文字古籍名錄整理研究叢書, 民族出版社, 2013 年がある.
 - 3) チベット大蔵経に関する近年の出版に, 紮呬『《大蔵経》概論』藏学文庫, 青海人民出版社, 2008 年; 南傑多吉 rNam rgyal rdo rje『吐蕃時期仏経目錄研究』*Bod btsan poḥi skabs kyi bkaḥ bstan dkar chag la dpyad pa*, 甘肅民族出版社, 2011 年があるけれど, *Dk.* に対する筆者の基本的見解は拙稿『*lDan dkar ma* 目錄考』『田村芳朗博士還暦記念論集』仏教教理の研究』春秋社, 1982(昭和 57)年を参照頂きたい.
 - 4) 拙稿『*dkar chag lDan dkar ma* 考』I~IV, 『[国士館大学]教育学論叢』9~11, 13, 1991~1993, 1995(平成 3~5, 7)年(未完)を基礎資料として以下に論述するので, 拙稿を参照頂きたい.
 - 5) 拙稿『吐蕃に於ける僧伽と中観論書の蔵訳』『[江島惠教博士追悼記念論集]空と実在』春秋社, 2000(平成 12)年を参照頂きたい.
 - 6) 大谷大学図書館編『[西藏大蔵経]甘殊爾勘同目錄』京都, 1930~1932(昭和 5~7), 1965

- ～1983(昭和 40～58), 1985～1997(昭和 50～平成 9) 年 No. 1037(sDe dge 版 No. 7b), No. 1036(同 No. 7a)を参照頂きたい. sDe dge 版 No. 7b, pa 310b1～313a5 と No. 7a, na 91a1～92a7 に奥書があり, 後者の中で「翻訳師[で]僧侶[たる]Kluhi rgyal mtshan 等の時代に翻訳された hgyur けれども」(na 91a4)とあるけれど, 「等」とあり, その詳細が不明なので, 現時点では *Dk.* No. 486 と 487 を Kluhi rgyal mtshan の蔵訳に算入しない. 尚 Herrmann-pfandt 氏は *Dk.* No. 486 と 487 を各々 sDe dge 版 No. 7b と 7a, プトン No. 5 と 6(後注 8 参照)とに対応させている(注 1 参照).
- 7) 敦煌本の有無については Herrmann-pfandt 氏の記載に従った(注 1 参照). 但し, 敦煌本は新[欽]定語 skad gsar chad に従わない旧訳の資料を含むので, 十分に注意をして頂きたい.
- 8) 西岡祖秀『『ブトゥン仏教史』目録部索引』I～III, 『[東京大学文学部]文化交流研究施設研究紀要』1981～1983(昭和 56～58)年を参照頂きたい.
- 9) 拙稿「吐蕃訳経史」『講座敦煌 6]敦煌胡語文献』大東出版社, 1985(昭和 60)年を参照頂きたい.
- 10) 筆者の基礎資料(注 4 参照)に誤植があり「勅令 *bkhah/bkah lun* によって」が正しい. 以下同様に *Dk.* No. 493「インドの *gyis/gyi*」, 同 495「Kluhi rgyal mtshan[と]が *gyi/gyis*」を訂正する.
- 11) 唐蕃会盟碑については佐藤長『古代チベット史研究』上・下, 東洋史研究叢刊 5-2, 東洋史研究会, 1958～1959(昭和 33～34)年などを, 吐蕃時代の年代については山口瑞鳳「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』3, 1978(昭和 53)年を参照頂きたい.
- 12) Herrmann-pfandt 氏は sDe dge 版 No. 4140, 北京版 No. 5641 を第一候補に挙げており, 題目も分量も *Dk.* の記述に近似し, 同資料が対応するかもしれないけれど, 奥書を欠いている.
- 13) Herrmann-pfandt 氏が付記するプトンの *rGyud hbum gyi dkar chag*(東北蔵外 No. 5204)の記述であり, 同資料に関して筆者は同氏の記載に従う(注 1 参照).
- 14) 但し東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵経総目録・総索引』東北帝国大学, 1934(昭和 9) 年, No. 188 では Bi śuddha siṃ ha と Ye śes sde と dGe baḥi blo gros との翻訳で, Dzñā na garbha と Kluhi rgyal mtshan とが校訂したとし, 典故が不明である.
- 15) 拙稿「ダルマターシーラ考」『印度学仏教学研究』54-1, 2005(平成 17)年; 同(b)「吐蕃に於ける唯識論書の蔵訳」『印度学仏教学研究』55-2, 2007(平成 19)年を参照頂きたい.
- 16) Herrmann-pfandt 氏は sDe dge 版 No. 4388, 4515 と, 対応する北京版 No. 5928, 5428 とにも関説し, 敦煌本ありとするけれど, 何れも奥書を欠いている(注 1 参照).

〈キーワード〉 *dkar chag lDan dkar ma*, Kluhi rgyal mtshan, hDul baḥi sde snod

(国士舘大学教授)